

フロギストン ー炭手前ー フロギストン ー等三輪空寂ー

Phlogiston —Sumi Temae—
Phlogiston —Toh San Rin Ku Jyaku—

キーワード：

フロギストン
茶道
炭手前
焼失
かけがわ茶エンナーレ

抄録

炭手前 作品サイズ：H 50 × W 50 × D 50 (mm)
H 50 × W 50 × D 50 (mm) H 50 × W 50 × D 100 (mm)
素材：檜 茶の木 灰 鉄 竹 陶器

等三輪空寂 作品サイズ：H 100 × W 300 × D 250 (mm)
素材：ピューター 鉄

発表場所：静岡県掛川市日坂 萬屋2階 発表期間：2017年10月21日(土)～11月19日(日)

2017年10月21日～11月19日に開催されたかけがわ茶エンナーレにおいて、「みんなのミュージアム」参加作家として東山・日坂エリア内にある萬屋にて作品展示を行った。萬屋は旧東海道日坂宿の名残として保存されている旅籠である。このイベント全体が「茶エンナーレ」と銘打っていることもあり、茶道とその思想的背景となっている禅を作品テーマとすることにした。

筆者は長年にわたり炭化彫刻である「フロギストンシリーズ」を発表してきたが、この展覧会においては作品の焼失を試みることにした。「フロギストン」とは、18世紀のドイツ人化学者 G.E. シュタールが提唱した仮想物質の名称であり、ものが燃える時には物質からフロギストンが抜け出て後に灰が残るとされていた。酸素を遮断して高温にすることで生じる炭化現象は燃焼ではないが、生の木材から炭へと変質する際にあたかも何かが抜け出た後の抜け殻のように感じられることからこのタイトルをつけている。茶道の世界では燃料としての炭を焼く際に偶然入った木の実などを「お花炭」として珍重している。僧堂での生活の中で焚き火後から偶然「お花炭」を見出したことがこれらの作品を制作し始めるきっかけとなっている。

フロギストン ー炭手前ー

今回の展示では作品の制作過程を映像で記録し、展覧会期間中に一つずつ作品を茶会のための燃料として燃やし、その様子を映像化して展示することとした。手のひらに収まるほどの大きさの作品は萬屋で使われていた四角い火鉢の中に展示され、焼失したのちにはその日付を記したプレートを置いた。茶会は期間中に2回、Tea of the Men のメンバーにより行われた。この茶会において展示作品である炭茶杓と「フロギストン ー等三輪空寂ー」のピューターの器を茶器として使用した。

展示会場の一番奥には自作の黒楽茶碗と炭化した茶杓と茶筌を展示した。茶杓は茶の木の枝から彫り出したものである。



「フロギストン ー炭手前ー」より
1回目に焼失した作品



「フロギストン ー炭手前ー」より
2回目に焼失した作品



〈作品〉

山本浩二

12

フロギストン

―炭手前―

フロギストン

―等三輪空寂―

フロギストン ―炭手前―

茶事において炉を用いる場合、懐石前の初炭と薄茶前の後炭と呼ばれる二回の炭手前が行われる。いずれも燃料としての炭を足し、火力を調整するという行為が洗練され、作法となったものである。

今回の展覧会では、炭化彫刻作品を茶会でお湯を沸かすための燃料として燃やし、映像で記録する。木という材質から炭化によって炭に変質した作品はさらに炉の中で熱というエネルギーに変わり、お湯を温め茶となる。

「一期一会」というのは主客という言葉で表される人間の出会いだけをいうのではないと考える。この瞬間に現成しているすべての事象はそれぞれに自由闊達に動き続けており、それぞれの来歴を経た上ですべてが「たまたま」出会っているのである。炭には炭の、灰には灰の「あり方」がある。

以下『正法眼蔵 現成公案』より

「たき木、はひ（灰）となる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきありのちあり。前後ありといへども、前後際断せり。灰は灰の法位にありて、のちありさきあり。かのたき木、はひとりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり。このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり。このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらみなり、死も一時のくらみなり。たとへば、冬と春のごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。」

奥の屋根裏に展示してある茶道具のうち、お茶の木を削って炭化させた茶杓は今展覧会期間中の茶会で使用される。

フロギストン 一等三輪空寂

禅宗の僧侶は修行中に食事をする際、入れ子になった応量器と呼ばれる器を使う。朝食の際には展鉢の偈（てんぱつのげ）と呼ばれる短いお唱えがある。

仏生迦毘羅（ぶっしょうかびら）成道摩揭陀（じょうどうまかだ）
 説法波羅奈（せっぽうはらな）入滅拘絺羅（にゅうめつくちら）
 如来応量器（にょらいおうりょうぎ）我今得敷展（がこんとくふてん）
 願共一切衆（がんでいっさいしゅ） 等三輪空寂（とうさんりんくうじゃく）

（訳）

お釈迦様はカピラ国にお生まれになった マカダ国で悟りを開かれた
 ハラナ国で説法された クチラ国でお亡くなりになった
 如来の応量器を我は今敷展する機会を得た
 願わくは一切衆生とともに 等しく三輪を空寂ならしめん

三輪とは布施する者、それを受ける者、施物の三つを指し、それらがともに空であり執着すべきでないことを結びの句は述べている。

この作品は応量器を採寸して木でかたちづくり、それを炭化させたのちに型取りして錫合金に置き換えたものである。鑄造という技術は素材の置き換えの過程で必ず型という空洞が生じる。同じ漢字であるが仏教でいう「空（くう）」とは空っぽという意味ではない。それはあらゆるものに固有の実体がないさまを表す言葉であり、その根拠となるのが縁起という考え方である。全ては縁に応じて転変していくものであり、それゆえに執着してはならないと説く。



〈作
品〉

山本浩二

16

「フロギストン 一炭手前」より
黒楽茶碗 炭化茶杓 炭化茶筴



フロギストン
一炭手前
フロギストン
一等三輪空寂

「フロギストン 一等三輪空寂」

映像作品



(映像は左上のタイトルから始まり、下に流れていく)